弘前大学教育学部紀要　第116号（第１分冊）：１～10（2016年10月）
Bull. Fac. Educ. Hirosaki Univ. 116-1：１～10（Oct. 2016）

『倭訓栞』の語彙増補における編纂態度について

About Criteria for Vocabulary Augmentation of WAKUN NO SHIORI

平　井　吾　門*
Amon HIRAI*

要旨

『倭訓栞』の見出し項目と語釈量との相関関係を測るため、『分類語彙表』を援用して比較検証することで、『倭訓栞』の編纂が進むに連れて多様な分野の語が万遍なく採取される様子が浮かび上がった。その際、単義語であり、なおかつ語釈量も少ない項目の増補が多様性の拡充に大きな役割を果たしていた。

キーワード：谷川士清、国語辞書、自筆本、清逸本、国語学史

０　はじめに

谷川士清（ことすが）（1709-1776）によって編纂が始められた『倭訓栞（わくんのしおり）』（以下、倭訓栞）は、前・中・後編の全編合わせて延べ約２万語 (注１) を収録した書物であり、『雅言集覧』『俚言集覧』とともに近世の３大国語辞書として知られている。国語学史での言及は多いものの、明治期に確立された印象論の多くが現在まで通用しており、近年は基礎データの拡充を伴う研究が進んでいる。

筆者は、一般に「近代国語辞書の祖」とも言われる倭訓栞に関して、「編纂が進み、語義の記述方法が確立されていく過程に、近現代の国語辞書へと繋がる辞書形態の萌芽が見られる」ということを指摘し、その本源を究明しようと試みてきた (注２)。本稿では、倭訓栞の性格を収録語彙の具体的な語義分類から特徴付けるとともに、個々の見出し語が持つ語釈量の計測結果と合わせ考えることで、諸本間における編纂態度の変遷を実証的に描き出すことを目的とする。

なお、倭訓栞には谷川士清自筆本（自筆本）、刊行直前の姿を示すとされる谷川清逸（すがはや）転写本（清逸本）、整版本、そして活字本が知られている (注３)。倭訓栞の成立過程を解明する手段として、本稿においては自筆本および清逸本の比較を中心に行う。自筆本は、「初期稿本あるいはそれに近いもの」（三澤2006）と目されており、全７冊で完結し、収録語彙数や語釈量も多くはない。清逸本は、谷川士清の友人・河北景楨が書写していた写本を、士清の子孫である清逸が転写したものであり、語彙数・語釈量ともに膨張した全40冊の完本である。倭訓栞は、整版本の刊行を前に書肆の要請を受けて項目・語釈に大幅な節略が為されたことが知られているが、清逸本は、節略を受ける直前の様子を示す本として近年注目されている。転写本である清逸本の扱いについては更なる検証を要するものであるが (注４)、残存資料の少ない倭訓栞の研究において重要資料であることは言を俟たない。本稿では、具体的な数値を示しつつも大局を述べることが目的であるため、積極的に清逸本を活用するものである。

１　先行研究

倭訓栞は、自筆本から整版本へと至る編纂過程で語釈量も収録語彙数も膨張しており、倭訓栞の語彙的特徴を論ずるに際して、「どのような語彙がどのように増補されていったのか」ということは優先的に議論されるべきである。しかし、倭訓栞の収録語彙の変遷に関する調査は初期段階にある。また、倭訓栞は国語辞書史の流れで言及されることが多い書物であり、概説書等で語彙的特徴が取り上げられることも少なくないが、倭訓栞の収録語彙の特徴について具体的に論じたものは無く、全容は未解明と言って良い。整版本を用いた従来の研究においては、次の青木伶子氏のような抽象的かつ大局的な論評が一般的であり（青木1986）、その特徴を具体的な数値で示したものはなかった。

＊弘前大学教育学部国語教育講座
Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Education, Hirosaki University

即ち前編は凡例に言ふが如く、古言雅語を中心とし、収載項目数約七千五百、中編には俗語・方言をも収め口語的色彩強く、項目数九千六百余り。（中略）後編は約三千八百項目、動植物・固有名詞・外来語等の比率の高いことが特徴的である。勿論中編にも古語・外来語の収載あり、後編にも俗語が目立ちはするけれども、概して言ふならば、たとへば中編所載の古語は、古語の中ではやや雅ならざる感あるものが多い。従って擬音語・擬容語の類は古語口語に拘らず殆ど中編に収める、（以下略、一部表記を改めた）

ここでは、何を以て収録語彙の特徴や位相を定めたのか明確ではなく、管見の限りそのような基準が明示された他の研究も見られない。このため、語彙の増補に関する論を展開するには、諸本比較を念頭において新たに語彙分類の基準を選定する必要がある。

整版本は110年の時をかけて段階的に刊行されてきたが、昭和以前の倭訓栞研究では調査資料の制限があり、特に成立過程についての論は推測に頼らざるを得なかった部分も多い。整版本首巻冒頭の「凡例」には、「言語浩繁なれは簡帙もまた重大なるをもて分て三編とす今前編を刊行す此編もはら古言雅語を解釋するものなり」と記される。これを受けて、自筆本及び清逸本の調査が為されるまでは、「前・中・後の３編で構成されてゐる「栞」の組織は、士清の最初から構想であつた」（北岡1968）という捉え方が定説であったが、三澤氏の自筆本研究により、当初そのような構成は想定されていなかったことが明らかとなっている。

整版本では、凡例で示された通り最終的に分割出版されたわけであるから、前中後編にそれぞれ語彙的特徴があるのは当然である。しかし、当初総合的に収集された語彙を分割出版したことが判明した以上、「前編の為に●●に関する語彙を収集し、中編の為に▲▲に関する語彙を収集した」といった類の指摘は無意味なものとなる。国語辞書史の中で書物相互の影響関係を考察する場合にも、「長い時間をかけて段階的に語彙収集が行われた」という解釈は倭訓栞の本質を見誤らせることになろう（注5）。

２　自筆本倭訓栞の語彙分類について

平井（2015）では、倭訓栞の語彙分類に関する意義を示した。そして、2014年に刊行された『日本古典対照分類語彙表』（笠間書院）を援用することの有用性と限界について述べた。

その上で自筆本のあ行（あ～を）について『日本古典対照分類語彙表』に基づき意義分類したところ、次のような結論を得た。

① 体の類が68.8％を占めており、所謂名詞を中心として語彙が収集されている。
② 体の類の中では、「抽象的関係」を表す言葉から「自然物および自然現象」を表す言葉まで万遍なく用例が採取されている。
③ 全体に占める割合は少なくなるが、用の類や相の類、その他の類においても全体的な分布の広がりが見られ、1つの辞書の中で日本語の総体を幅広く示そうとしている。

さて、平井（2014b）では、倭訓栞の成立過程を示す３本（自筆本・清逸本・整版本）にそれぞれ平均的な語釈より遥かに分量の多い項目があることに注目し、それらを「長大項目」と名付けて抽出し、どのような性格を持つものであるのか分析した。その結果、次のような結論を得ている。

① 自筆本から整版本へと編纂が進んでいく中で、全体的に平均的な長さの語釈に纏めていく傾向が見られた。一方で、「この語だけは行数を費やしてでも語釈に分量を割くべきである」という長大項目の存在が目につく。
② 長大な項目とは対照的に、極めて短い語釈の項目も増補される。その語釈にはごく僅かな情報しか記載されていないため、各本による性格の差は見られない。すなわち、全体を通して語釈の増強よりも語の採録自体を重視し、収録語彙数を増やすという意識の下に増補された項目がある。
③ 長大項目の選択に関しては、自筆本起稿の際に力を入れていた神道関係の言葉や上代文献に出てくる言葉への傾斜を脱して、より一般的で汎用性の高い名詞へと意識が移り変わっていく様子が明らかとなった。
④ 自筆本から清逸本への変化においては、語釈の長短が必ずしも対応していないものの、清逸本から整版本への変化では、語釈の長短がほぼ対応している。すなわち、自筆本から清逸本へと編纂が進む中で編纂態度が変化した事、及び整版本を完成させるにあたって節略が求められた際には、清逸本における編纂態

度を可能な限り保ちつつ、全体的に行数を均していったという事、が分かる。

⑤　これらから、倭訓栞が神道や上代文献に関する語彙集のような性格のものから、より一般的な語彙を追求する辞書へと編纂態度を変化させていき、最終的に商品として成形するにあたってさらにその度合いを明確にしていった、というように考えられる。

以上より、倭訓栞の編纂態度の変化を踏まえたうえで、改めて各本の収録語彙の特徴を整理し、「どのような語が増補されたのか」という点を考察することが本稿の目的である。

３　研究方法

自筆本「あ」行部の分類を踏まえて、本稿では次のことを行う。

①　自筆本の語彙分類の拡大（「あ～そ」部）、及び清逸本「あ」部の語彙分類
②　①の結果に自筆本・清逸本それぞれの語釈量を掛け合わせ、比較分析

まず、①の核となる『日本古典対照分類語彙表』を用いた語彙分類について、その基準を明確にしておく。『日本古典対照分類語彙表』では全てのデータが電子媒体で提供されているが、平井（2015）で確かめた通り、

①　収録語彙の活用や連語化に基づく語形の相違
②　収録語彙の位相の相違
③　意味分類の相違
④　データの排列順位による相違
⑤　諸本の異同に基づく相違
⑥　単語区切り
⑦　清濁認定の相違

といった点から、倭訓栞の見出し項目のデータと組み合わせて機械的に集計することは不可能であり、１つ１つの見出し語の確認が不可欠であった。『日本古典対照分類語彙表』で示された古典語の意義分類は参考にしつつ、１つ１つの語句を『分類語彙表　増補改訂版』（国立国語研究所編、2004）で確認、認定していく作業が必要となる。その際には、宮島達夫「古典語の統計と意味」（『日本古典対照分類語彙表』に収録）による次のような思考プロセスが必要となる。

分類語彙表にしたがわずに別の項目にいれた例もある。「たたり」は「13003 飢渇・酔い・疲労・睡眠など」と「13681 礼」とにあるが，どちらもおちつかず、動詞「たたる」が「23310 人生・禍福」とあるので「13310 人生・禍福」に入れた。分類語彙表では「入水」を「15702 死」にしているが、宇治拾遺の例は「水にはいること」であるので、「11532 入り・入れ」にした。例外として新設した「39999 枕詞」は「あしひきの、そらみつ」など意味不明のものにかぎり、一般の品詞として解釈できるものは「くさまくら，14270 寝具」のように枕詞にはいれていない。枕詞以外でまったく意味不明の語句には99999 という番号をつけた。「かはは、つのかめ ...（ともに枕草子）」などである。

意味の解釈は基本的に『日本国語大辞典』（第２版）により、『岩波古語辞典』を参照した箇所もある。万葉の項目は例外的に日国でも意味未詳のまま取りあげることがある。「うちくちぶり」（語義未詳）、「まつしだす」（語義および語構成未詳）などがその例である。辞典で語義未詳ですますのは、めずらしいのではないだろうか。これらは、何らかの番号がついていればいいだろうと思い、日国に紹介されている諸説のなかから適宜選択して意味番号をつけた。（以下略）

平井（2015）ではこれらを勘案した上で、自筆本の語彙分類を試行している。本稿では、さらにそれを受けて次のような基準を立てて分類番号を付与していくこととする。

①　古典語に対応した現代語に関しては、語釈中の用例用法を判断した上で、原則として古典対照分類語彙表での認定に従って分類番号を採取する
②　見出し語の語形が分類語彙表と異なる場合には、語釈中に示された語義をもとに採取する
③　見出し語が動詞連用形か名詞かの判別ができない場合、語釈中の語義によってそれを認定する
④　見出し語が多義語の場合、本文中で示された意味を全て採取する
⑤　1つの項目の中で派生語（見出し語と異なる文字列の語）が示される場合、それは取らない
⑥　見出し語が句・連語の形をとる場合も、可能な限り本文で示される意味に合致する分類を

採取する

⑦　各巻の冒頭に必ず示される「あ」「い」「う」などの「1文字見出し」と、分類語彙表では扱っていない付属語の類についてはこれを考察の対象から除外する

⑧　枕詞に関しては、語釈中に「枕詞である」「後に●●という語が続く」という旨が書かれていないものについては原義が尊重されていると考えられるために別途分類番号を付す

4　自筆本の語彙分類

整版本倭訓栞（前編）は、谷川士清没後翌年に「あ～そ」部まで刊行されたが、そこまでは概ね士清の意向が反映されていると考えられる。逆に言えば、前編「た」部以降は後人の影響を考えねばならないが、議論は進んでいない。そのことを踏まえて、本稿では平井（2015）で行った調査範囲を拡大して、自筆本「あ～そ」部の語彙分類を行う。また、膨大な分量を誇る清逸本においても、「あ」部に分類を施して自筆本と比較し、その有用性を明らかにするものである。

本調査で得られた結果を次【表１】に示し、詳細を巻末に【分類一覧表１】として掲げる。

まず、自筆本「あ～そ」部には延べ1294の見出し語（句）が見られる。多義語を重複して計測することで、1603個の意義分類が得られる。なお、各部の冒頭にある「１文字見出し」15個、および「かも」「から」「こぞ」「そも」の４語（のうち付属語としての語義）、そして空見出し「せう」を分類不能として計測している。

得られた分類について、「体の類」「用の類」「相の類」「その他の類」「分類不能」それぞれの個数及び割合を表１から抜き出して示すと次の如くである。

体の類	1106	(68.95%)
用の類	275	(17.14%)
相の類	175	(10.91%)
その他の類	27	(1.68%)
分類不能	20	(1.24%)

この範囲に収められた語彙の分類は、体の類がほぼ７割を占め、「あ」～「を」について調査した平井（2015）と同様の傾向を確認する結果となった。「あ」～「そ」の各部立てを超えて、体の類に属する語が語彙収集の中心にあったと言えよう。さらに、この中から自筆本「あ」部のみを特に取り出してみると、表１より以下のようになる。比較的数の少ない相の類では傾向に差が出るものの、体の類では安定して７割の数値を挙げており、合わせて全体の大部分を占める体の類及び用の類の割合は、ほぼ1定して推移していることが分かる。

体の類	102	(72.85%)
用の類	28	(20.0%)
相の類	3	(2.14%)
その他の類	6	(4.28%)
分類不能	1	(0.71%)

【表１】

	自筆あ～そ	(%)	自筆あ	(%)	清逸あ	(%)
1.1(抽象的関係)	160	9.98	14	9.7	103	6.78
1.2(人間活動の主体)	151	9.41	15	10	286	18.8
1.3(人間活動――精神および行為)	146	9.1	15	10	143	9.41
1.4(生産物および用具)	266	16.6	20	14	268	17.6
1.5(自然物および自然現象)	383	23.9	38	26	393	25.9
2.1(抽象的関係)	86	5.36	6	4.1	61	4.01
2.3(精神および行為)	174	10.8	13	9	87	5.72
2.5(自然現象)	15	0.94	1	0.7	20	1.32
3.1(抽象的関係)	77	4.8	8	5.5	62	4.08
3.3(精神および行為)	79	4.93	4	2.8	45	2.96
3.5(自然現象)	13	0.81	1	0.7	11	0.72
3.9(枕詞)	6	0.37	3	2.1	12	0.79
4.11　接続	8	0.5	2	1.4	4	0.26
4.30　感動	19	1.18	4	2.8	18	1.18
4.50　動物の鳴き声	0	0	0	0	1	0.07
分類不能	20	1.25	1	0.7	6	0.39

次に、「あ」～「そ」部における分類について、より細かい内訳を確認する。表１より、体の類の中でも比較的抽象度の高い1.1～1.3の分類においてはほぼ均衡した形で語彙が収められている一方、具体的な一般名詞を含む1.4及び1.5の両分類が特に多いことが分かる。【分類一覧表１】によってさらに細かく内訳を見ると、1.4（生産物及び用具）における145道具、そして1.5（自然物および自然現象）における154植物と155動物の各分類が突出していることが認められる。個々に見ると相の類にも一部（31920（程度））伸びているものがあるものの、用の類には目立って伸びているものは見られない。

５　清逸本の分類及び自筆本との分類比較

続いて、清逸本との比較結果を確認する。まず、清逸本「あ」部にはのべ1117の見出し語（句）が見られる。自筆本同様、多義語を重複して計測することで、1520個の意義分類が得られる。

ここで得られた分類について、「体の類」「用の類」「相の類」「その他の類」「分類不能」それぞれの個数及び割合を前節表１から抜き出して示すと次の如くである。

体の類	1193	(78.48%)
用の類	168	(11.05%)
相の類	130	(8.55%)
その他の類	23	(1.51%)
分類不能	6	(0.39%)

自筆本「あ」部の分類結果と比較すると、用の類がそれほど増加していないのに比べ、体の類および相の類の増加が著しい。特に、体の類は８割近くに及んでいることが分かる。

より細かい内訳を表１より確認すると、比較的抽象度の高い1.1は自筆本「あ」部と比べて割合を減らしている一方、1.2については割合を増しており、自筆本からの大きな伸びを見せている。用の類についても、2.5では順当に伸びを見せている。

【分類一覧表１】によってさらに細かく内訳を見る。表のうち太線で囲った部分が、「あ部において、自筆本にはみられなかったが清逸本になって増補された箇所」である。用の類以下では、個々の個数はそこまで多いわけではないが、各分類の隙間を埋めるかのように広く語が増補されている様子が分かる。特に、143食料に注目すると、自筆本では０だったものが清逸本で45にまで増加しており、典拠を探るなどして意図的に特定の語を収集した様子が伺えよう。

さらに、より細かい分類をもとに、同じ分類に含まれる項目数が多い順に示すと次のようになる。

【清逸本あ部上位】

12590(固有地名)…105、15402(草本)…56、15401(木本)…41、12390(固有人名)…35、12030(神仏・精霊)…28、15504（魚類)…26、15502(鳥類)…25、12630(社寺・学校)…21、15501(哺乳類)…17、14410(家屋・建物）14210(衣服)…16、15506(その他の動物)…15、11635（朝晩）43010(間投)…14、15410(枝・葉・花・実）14460(戸・カーテン・敷物・畳など)…13

【自筆本あ部上位】

15402(草本)…８項目、11635(朝晩)…５項目、15606(骨・歯・爪・角・甲）15260(海・島）15401(木本）12590(固有地名）39999(枕詞）14160(コード・縄・綱など）15130(水・乾湿)…３項目、15502(鳥類）23543(争い）11643(未来）12030(神仏・精霊）43010(間投）13132(問答）15504(魚類）13392(手足の動作）15607(体液・分泌物）14210(衣服）33422(威厳・行儀・品行）15153(雨・雪）15200(宇宙・空)…２項目

自筆本ではそもそも突出した数を示す分類は見られないのであるが、清逸本では12590（固有地名）が105と圧倒的な出現数を誇っている。また、具体的な人名や神社名が多く含まれる12390（固有人名）及び12030(神仏・精霊）も上位にあり、合わせて所謂固有名詞の記載が顕著である。また、15402（草本)、15401（木本)、15504（魚類)、15502（鳥類)、15501（哺乳類）のように動植物の具体的な名称を示す項目が上位を占めていることも特徴的である。体・用の別で見ると、基本的には体の類のものが並び、用の類については清逸本でも上位にはまったく現れてこないことが分かる。

一方、同じ分類に含まれる項目が１つしかないものを抽出・集計すると、清逸本では体の類＝108分類、用の類＝52分類、相の類＝21分類、その他の類＝７分類となる。用の類の占める割合が高くなるということから、同じような意味の動詞はあまり選ばれない一方で、様々な意味の動詞が広く取り込まれていることが分かる(注６)。

６　語釈量との兼ね合い

これまでに見た分類をもとに、自筆本と清逸本にお

いて「１つの見出し項目に対していくつの（異なる）意味が記載されているか」ということを数値化した後、各々の見出し項目が持つ語釈の量（ここでは行数で定量化）との関わり方について考察する。

例えば、清逸本の「あまご」の語釈は次のようになっている。（／は改行を示す）

あまご　伊勢國菰野に産す鮎に似たる魚／也毎年６月16日御贄川に網して大神宮に献る／といへりあめごも同物也萬葉集に海子と書る／は漁父をいへり尼をあまごといふは御字なるへし〇／雲州の尼子は塩冶判官か後胤也祖先孤なりしを／祖母の尼公養育せしより称となれり尼子浦は／阿波國也義經経の着船せし所也

ここでは、７行の分量を費やして、①伊勢國菰野に産す鮎に似たる魚也毎年六月十六日御贄川に網して大神宮に献るといへりあめごも同物也、②萬葉集に□子と書るは漁父をいへり、③尼をあまごといふは御字なるへし、④雲州の尼子は塩冶判官か後胤也□先孤なりしを祖母の尼公養育せしより称となれり尼子浦は阿波國也義經経の着船せし所也、のように4つの意味が説明されている。なお、④の末にある尼子浦云々については、④への付加情報であり、所謂派生語として扱うため本調査で別途計測するものではない。

このように語釈量および語義数を計測し、それぞれの上位・下位を示すことでその特徴を洗い出したい。

まず、自筆本における両者の対応関係を確認する。平井 (2014b) では、自筆本の用箋の制約から１行に入る文字数が少ないこと、および自筆本の語釈に費やされる平均行数が2.8行程度であることを踏まえて次のように述べた。

自筆本には、突出した長大項目というものは少ない。自筆本は片面が12行であり、「あ～お」部までを通して見ても、最も長い語釈が「そら」の19行である。ただ、平均値が３行未満であることを考えると、12行を超える（片面全てを費やすほどの）項目は直感的にも長大な項目であるということが意識される。

ここで、自筆本最長の語釈量を持つ「そら」の項目を抜き出してみる。（／は改行を示す）

そら　虚空字をよめり自然の言なる／へし梵語といへるは心得かたし神代木に虚中／といふは未有方所也と釈せり凡そ虚空と／いへる詞は泛く天地の間を指ていへり後世たゝ天／のごと心得るは非す舊事紀に天御虚空豊／秋津根別と申す神号まします又大虚空に／翔行て巡睨て天降りますとも書せり神代／紀に坐於虚天爾生兒と見

【表２】

項目	分類	行数	意味数
そら	15200（宇宙・空）/33000（心）/31200（存在）	19	3
かはやしろ	13360（行事・式典・宗教的行事）	17	1
さくさめ	12120（親・先祖）/12040（男女）	14	2
こゝろば	14170（飾り）	14	1
すがる	21581（伸縮）/15505（昆虫）	13	2
かげろひ	15154（天気）/15505（昆虫）	12	2
しをり	11571（切断）/14590（札・帳など）	12	2
あわゆき	15153（雨・雪）	12	1
あなゝひ	14450（棚・台・壇など）	12	1
いが	12010（われ・なれ・かれ）/15410（枝・葉・花・実）/15506（その他の動物）/11633（日）	11	4
いわし	15504（魚類）	11	1
さいばり	14201（布・布地・織物）	11	1
するすみ	13410（身上）	11	1
かり	11040（本体・代理）/13230（音楽）/13811（牧畜・漁業・鉱業）/11700（空間・場所）/15502（鳥類）	10	5
あさがほ	15402（草本）/15505（昆虫）	10	2
えびす	12300（人種・民族）/12030（神仏・精霊）	10	2
かば	15401（木本）/15020（色）	10	2
あご	12130（子・子孫）	10	1
しだらでん	15030（音）	10	1
すべからく	43130（希望）	10	1

【表３】

項　目	分　　類	行　数	意味数
あふぎ	14541（日用品）	117	1
あすか	15502（鳥類）/12590（固有地名）/12590（固有地名）	51	3
あやめ	13071（論理・証明・偽り・誤り・訂正など）/11840（模様・目）/12416（職人）/15402（草本）/14210（衣服）	44	5
あの	12416（職人）/12590（固有地名）/12010（われ・なれ・かれ）/12390（固有人名）	39	4
あらし	11344（支障・損じ・荒廃）/15151（風）	39	2
あまつきつね	15210（天体）/12030（神仏・精霊）	37	2
あこぎ	12590（固有地名）/12390（固有人名）/15401（木本）	35	3
あめ	15200（宇宙・空）/13047（信仰・宗教）/15153（雨・雪）/15504（魚類）/14340（菓子）/14350（飲料・たばこ）/14200（衣料・綿・革・糸）/15506（その他の動物）	33	8
あふひ	15402（草本）/15402（草本）	33	2
あま	15200（宇宙・空）/15260（海・島）/12413（農林水産業）/12590（固有地名）/12410（専門的・技術的職業）/12390（固有人名）	32	6
あへ	13680（待遇）/21550（合体・出会い・集合など）/12590（固有地名）	32	3
あし	15603（手足・指）/11911（長短・高低・深浅・厚薄・遠近）/15402（草本）/13721（資本・金銭）/12590（固有地名）/14152（柄・つえ・へらなど	31	6
あはび	15506（その他の動物）	28	1
あさがほ	13030（表情・態度）/15402（草本）/15401（木本）/15505（昆虫）/15506（その他の動物）	27	5
あみだ	12030（神仏・精霊）/12390（固有人名）	27	2
あゝ	43010（間投）	26	1
あふち	15401（木本）	26	1
あららぎ	15402（草本）/14410（家屋・建物）/15401（木本）/13370（遊楽）/12590（固有地名）	24	5
あなめ	31346（難易・安危）	21	1
あや	43010（間投）/11840（模様・目）/14201（布・布地・織物）/14541（日用品）	20	4
あふれう	23620（運営）/15721（病気・体調）	20	2
あらればしり	13230（音楽）	20	1
ありあけ	11635（朝晩）	20	1
あげまき	15605（皮・毛髪・羽毛）/12050（老少）/13840（裁縫）/14160（コード・縄・綱など）/15506（その他の動物）	19	5
あご	12130（子・子孫）/12050（老少）/15601（頭・目鼻・顔）/15504（魚類）	19	4
あらき	14120（木・石・金）/14700（地類（土地利用））/12630（社寺・学校）/14350（飲料・たばこ）	19	4
あざか	12590（固有地名）/12590（固有地名）/12590（固有地名）	19	3
あさま	15250（川・湖）/12590（固有地名）	19	2
あつた	12630（社寺・学校）	19	1
あさひ	15210（天体）/12590（固有地名）/12390（固有人名）	18	3
あづま	12590（固有地名）/12530（国）/12630（社寺・学校）	18	3
あみ	14161（網）/15502（鳥類）/15506（その他の動物）	18	3
あに	12140（兄弟）/43120（予期）	18	2
あど	12450（その他の仕手）/13132（問答）/12390（固有人名）/15603（手足・指）	17	4
あがた	12550（政治的区画）/12540（都会・田舎）/12390（固有人名）	17	3
あしか	15501（哺乳類）/15506（その他の動物）/15501（哺乳類）	17	3
あづさ	15401（木本）/14551（武器）/12590（固有地名）	17	3
あこやのたま	15606（骨・歯・爪・角・甲）/14310（料理）	17	2
あんなん	12590（固有地名）	17	1

えたるは天上と／中国との道中を指ていへるなるへし古事記／に天津日高の御子虚空津日高といへるは／天子と太子とをかくあがめていふことし〇／心そらなる足もそらにて見るそらなききくそら／なきなといふは落つかぬ事をいふめり新後／拾遺集に／時の間にうつろひやすき花の色は今をさかりと見る空もなし／〇そら言そら笑なとは虚偽の義なりいひ／そらすなとも鷹なとのそれるといふに同し／俗にそらを轉してすらともいふすらみゝ／すらかだなと是なり

平井（2014b）で指摘した通り、この語釈では語源・語義・出典・用例などの情報が盛り込まれているが、語義の数を数えてみれば、15200（宇宙・空）、33000（心）、31200（存在）にそれぞれ分類される３要素しか含んでいないことが分かる。平均的な語釈量が少ないことと相俟って、基本的に語釈量と語義数はほぼ比例の関係にあると言えるが、「そら」を初めとして【表２】のように、多くの行数を費やすにも拘らず、語義数の少ないものも散見される。ただし、自筆本は全体として語釈量が少なく、コンパクトにまとまっているため、先にも述べたように長大な項目と語義数が大きく問題となることはない。

一方、清逸本における状況は大きく異なる。清逸本における語釈行数の多い順に並べてみると、【表３】のようになる。これを見ると、行数が少なくなるにつれて語義数は収束していくものの、行数が多くなるにつれて語義数の少ないものが目立つようになるのが分かる。特に、清逸本「あ」部において最大の語釈量を誇る「あふぎ」においては、驚くべきことに示される語義数は１つに過ぎず、ひたすら扇の種類や関連したエピソードの類が記載されているのである。

さて、語義数が増えれば語釈量も増えるのはある意味で当然であるが、反対に意味が少ないものがどの程度語釈量を費やしているのか、という観点で改めてまとめてみたい。ここでは、語義数１の項目についてその行数及び項目数を【表４】に示す。

自筆本に関しては、上述の通り、最長でも19行の語釈に過ぎず、基本的には少ない語釈量のものが数多くのせられている様子が分かる。一方清逸本では、１行に収められる文字数が自筆本の1.5倍ほどある上に、このような分布を見せている。117行という突出した語釈量を誇る「あふぎ」は別格であるにせよ、「あ」部１つだけでこのように長大な項目がいくつも置かれている状況は注目に値する。編纂が進む中で、分類の異なる同音異義語が幅広く増補されることで、結果として１つの項目の語釈が長大になるものは当然ある。その一方で、意味に広がりはなくとも、用例の追加によってただ１つの語義に関する語釈が繰り返され、意図的に長大となる項目が存在することを示している。

【表４】

清逸本	
行数	項目数
1	128
2	290
3	141
4	106
5	64
6	23
7	33
8	20
9	18
10	6
11	4
12	5
13	8
14	2
16	3
17	1
19	1
20	2
21	1
26	2
28	1
117	1

自筆本	
行数	項目数
1	223
2	426
3	238
4	90
5	42
6	24
7	14
8	10
9	6
10	3
11	3
12	3
14	2
17	1
19	1

ここで、上に取り上げた中で「語義数が１であり、行数が１あるいは２の項目」について、分類表におけるその分布を確認する（巻末の【分類１覧表２】）。「●」印は、該当する分類の項目が１つでもあることを示す。太線で囲った部分は、「あ部において、自筆本には表れなかった箇所」である。この表から明らかな通り、語義数が１で行数も１～２行しかない項目、すなわち極めて簡潔な語釈のみを備えた項目が、先に示した清逸本の分布の広がりを支えていることが分かるのである。

7　まとめ

倭訓栞の編纂は、画一的な基準によって為されてはおらず、「短い語釈で多様な語義を列挙していくこと」及び「長大な語釈によって特定の語義についての記述を濃密にしていくこと」という２つの基準から増補が進んでいった。特に前者については、士清が（当然な

がら分類語彙表を用いていたわけはないのであるが）日本語の総体というものを思い描きながら、国語辞書としての倭訓栞制作を進めていく様子が伺えるのである。その際、どのようなものに典拠を求め、具体的にどのように語彙を拡大していったか。それは今後の研究に俟ちたい。

〈注〉

1）項目数については三澤薫生（2014・2015）「『倭訓栞』の見出し語数と重出語について（上・下）」（和洋國文研究49、50）の論考があり、北岡氏が計測して定説となった「20897語」は訂正されている。

2）平井吾門、「自筆本『倭訓栞』増補の展開について」、日本語学論集８、2012

3）倭訓栞の自筆本や清逸本については、三澤薫生「谷川士清自筆『倭訓栞』について」（和洋国文研究41、2006）や同「河北景楨筆、谷川清逸書写『和訓栞』稿本について（上）」（和洋女子大学紀要人文系編48、2008）に詳しい。

4）清逸本の扱いの注意点については、平井吾門「倭訓栞を中心とした近世国語辞書史研究の目指すもの」（弘前大学国語国文学35、2014）を参照。

5）和訓栞　国語辞書。93巻。谷川士清（たにがわことすが）（1709-76）編。前・中・後編の編ごとに、仮名一字の語、二字の語、三字の語などそれぞれ別に、また第二音節までを五十音順に配列してある。前編には古言・雅語、中編に雅語、後編に方言・俗語を収録するのは、編纂（へんさん）の過程を示すものであろう。語彙（ごい）は豊富で、確かな根拠に基づいた語釈も穏当である。巻首の「大綱」では音韻、漢字、仮名、方言など、国語を概説している。本書の刊行には、士清の没した翌年から1887年（明治20）までの100余年を要した。［沖森卓也］『日本大百科全書（ニッポニカ）』JapanKnowledge, http://japanknowledge.com,（参照2016-01-03）

6）なお、体の類と用の類についてはそれぞれ名詞及び動詞とある程度置き換えられるものであるが、相の類については極めて雑多な形が混在しているため、現代的な品詞ににわかには置き換えられない。

〈参考文献〉

北岡四良「和訓栞成立私考」（皇学館大学紀要６, 1968）

青木伶子「倭訓栞と和字正濫鈔」（山田忠雄編『国語史学の為に　第３部』所収，笠間書院, 1986）

尾崎知光『倭訓栞大綱　解説・資料』（勉誠社, 1984）

平井吾門「倭訓栞を中心とした近世国語辞書史研究の目指すもの」（弘前大学国語国文学, 35号, 1-26頁, 2014a）

平井吾門「倭訓栞の長大項目」（弘前大学教育学部紀要112, 1-10頁, 2014b）

平井吾門「倭訓栞の語彙分類試論」（弘前大学教育学部紀要113, 1-8頁, 2015）

平井吾門「倭訓栞の語種――自筆本「ら行」部を中心として」（『日本語言文化研究』，第４輯下，延辺大学出版社, 2016）

三澤薫生「谷川士清自筆『倭訓栞』について」（和洋国文研究, 41号, 36-47頁, 2006）

三澤薫生「もう一つの『和訓栞』稿本―『俚言集覧』の『和訓栞』について―」（和洋國文研究, 42号，33-42頁, 2007）

三澤薫生「谷川士清自筆本倭訓栞　影印・研究・索引」（勉誠出版, 2008a）

三澤薫生「河北景楨筆、谷川清逸書写『和訓栞』稿本について（上）」（和洋女子大学紀要人文系編, 48号, 15-31頁, 2008b）

〈謝辞〉

本稿の調査では、国立国語研究所（2004）『分類語彙表増補改訂版データベース』（ver.1.0）を参照した。また、本稿は第112回 訓点語学会研究発表会（2015年5月10日於京都大学）での発表に基づくものである。当日多くのご意見を賜った方々に感謝申し上げる。なお、本研究はＪＳＰＳ科研費26770159の助成を受けたものである。

（2016. 8.8　受理）

清逸本意味数１、行数１～２の項目

1 体の類						
1.1	抽象的関係					
	110	事柄	2	0	2	●
	111	類	2	1	5	●
	112	存在	1	0	4	
	113	様相	4	0	8	●
	114	力	0	0	1	
	115	作用	2	1	12	●
	116	時間	14	1	15	●
	117	空間	5	1	11	●
	118	形	3	0	4	●
	119	量	2	1	6	●
1.2	人間活動の主体					
	120	人間	28	2	5	●
	121	家族	6	0	6	●
	122	仲間	3	1	3	●
	123	人物	35	1	6	●
	124	成員	9	1	9	●
	125	公私	105	1	6	●
	126	社会	21	0	5	●
	127	機関	1	0	1	●
1.3	人間活動－精神および行為					
	130	心	3	1	21	●
	131	言語	3	2	9	●
	132	芸術	4	0	3	●
	133	生活	10	1	16	●
	134	行為	3	1	5	●
	135	交わり	3	1	6	●
	136	待遇	1	1	7	●
	137	経済	3	1	9	●
	138	事業	4	1	9	●
1.4	生産物および用具					
	140	物品	2	0	1	●
	141	資材	11	1	12	●
	142	衣料	16	2	12	●
	143	食料	11	0	9	●
	144	住居	16	1	8	●
	145	道具	9	1	18	●
	146	機械	12	1	4	●
	147	土地利用	5	1	3	●
1.5	自然物および自然現象					
	150	自然	10	0	3	●
	151	物質	12	1	10	●
	152	天地	11	2	7	●
	153	生物	0	0	0	
	154	植物	56	3	5	●
	155	動物	26	1	6	●
	156	身体	9	1	9	●
	157	生命	9	1	6	●
2 用の類						
2.1	抽象的関係					
	210	真偽	0	0	0	
	211	類	6	1	3	●
	212	存在	6	0	3	●
	213	様相	1	1	2	
	214	力	0	0	0	

【分類一覧表２】

	215	作用	6	1	25	●
	216	時間	2	0	3	●
	217	空間	0	0	1	
	219	量	1	1	1	
2.3	精神および行為					
	230	心	5	1	23	●
	231	言語	3	0	4	
	232	芸術	1	0	0	
	233	生活	3	1	15	●
	234	行為	2	0	3	●
	235	交わり	3	1	8	●
	236	待遇	5	1	10	●
	237	経済	2	1	4	
	238	事業	2	1	9	●
2.5	自然現象					
	250	自然	2	1	3	
	251	物質	1	0	3	●
	252	天地	0	0	0	
	256	身体	0	0	1	
	257	生命	4	0	4	●
3 相の類						
3.1	抽象的関係					
	310	真偽	1	1	3	●
	311	類	6	1	3	●
	312	存在	2	0	1	●
	313	様相	8	1	7	●
	314	力	1	0	1	●
	315	作用	0	0	1	
	316	時間	5	1	7	●
	317	空間	0	0	1	
	318	形	0	0	1	
	319	量	4	1	6	●
3.3	精神および行為					
	330	心	4	1	15	●
	331	言語	0	0	1	
	333	生活	0	0	3	
	334	行為	4	2	5	●
	335	交わり	0	0	0	
	336	待遇	4	0	1	
	337	経済	0	0	1	
3.5	自然現象					
	350	自然	4	1	5	●
	351	物質	0	0	2	
	352	天地	0	0	1	
	353	生物	0	0	0	
	356	身体	1	0	0	●
	357	生命	0	0	2	
3.9	枕詞					
	399	枕詞	12	3	6	
4 その他の類						
4	411	接続	2	1	6	
	430	感動	14	1	3	●
	431	判断	1	1	3	
	432	呼び掛け	1	0	2	
	433	挨拶	1	0	2	●
	450	動物の鳴き声	1	0	0	

【分類一覧表１】

			自筆あ～そ	自筆あ	清逸あ
1 体の類					
1.1	抽象的関係				
	110	事柄	7	0	5
	111	類	9	2	5
	112	存在	5	0	2
	113	様相	11	0	10
	114	力	1	0	0
	115	作用	15	2	17
	116	時間	53	8	35
	117	空間	42	1	17
	118	形	5	0	8
	119	量	12	1	4
1.2	人間活動の主体				
	120	人間	28	3	54
	121	家族	30	0	14
	122	仲間	8	2	5
	123	人物	27	3	50
	124	成員	25	2	30
	125	公私	24	5	109
	126	社会	7	0	23
	127	機関	2	0	1
1.3	人間活動－精神および行為				
	130	心	40	3	25
	131	言語	17	2	21
	132	芸術	3	0	6
	133	生活	34	4	38
	134	行為	7	1	12
	135	交わり	11	1	4
	136	待遇	8	1	8
	137	経済	11	2	10
	138	事業	15	1	19
1.4	生産物および用具				
	140	物品	2	0	2
	141	資材	35	7	32
	142	衣料	53	5	53
	143	食料	26	0	45
	144	住居	45	2	48
	145	道具	83	4	53
	146	機械	9	1	20
	147	土地利用	13	1	15
1.5	自然物および自然現象				
	150	自然	15	0	18
	151	物質	46	7	58
	152	天地	41	5	43
	153	生物	0	0	0
	154	植物	116	12	122
	155	動物	101	6	98
	156	身体	42	7	33
	157	生命	22	1	21
2 用の類					
2.1	抽象的関係				
	210	真偽	8	0	0
	211	類	6	1	9
	212	存在	2	0	10
	213	様相	0	1	2
	214	力	0	0	0
	215	作用	65	3	35
	216	時間	3	0	4

			自筆あ～そ	自筆あ	清逸あ
	217	空間	1	0	0
	219	量	1	1	1
2.3	精神および行為				
	230	心	59	3	25
	231	言語	7	0	6
	232	芸術	0	0	1
	233	生活	38	3	18
	234	行為	3	0	4
	235	交わり	14	3	7
	236	待遇	29	1	14
	237	経済	7	1	4
	238	事業	17	2	8
2.5	自然現象				
	250	自然	3	1	4
	251	物質	6	0	5
	252	天地	0	0	0
	256	身体	2	0	0
	257	生命	4	0	11
3 相の類					
3.1	抽象的関係				
	310	真偽	6	1	3
	311	類	5	1	10
	312	存在	2	0	4
	313	様相	17	3	17
	314	力	3	0	1
	315	作用	1	0	0
	316	時間	13	1	11
	317	空間	1	0	0
	318	形	1	0	0
	319	量	28	2	16
3.3	精神および行為				
	330	心	43	2	28
	331	言語	4	0	0
	333	生活	7	0	0
	334	行為	20	2	13
	335	交わり	0	0	0
	336	待遇	4	0	4
	337	経済	1	0	0
3.5	自然現象				
	350	自然	8	1	10
	351	物質	2	0	0
	352	天地	1	0	0
	353	生物	0	0	0
	356	身体	0	0	1
	357	生命	2	0	0
3.9	枕詞				
	399	枕詞	6	3	12
4 その他の類					
4	411	接続	8	2	4
	430	感動	8	3	14
	431	判断	6	1	1
	432	呼び掛け	3	0	1
	433	挨拶	2	0	2
	450	動物の鳴き声	0	0	1